

7 学会・研究会等における成果の公表

(1) 日本応用動物昆虫学会

・第70回大会（令和8年3月28日～30日：熊本市）

（一般講演）「チュウゴクアミガサハゴロモの埼玉県内における生態と発消長について」

侵入害虫チュウゴクアミガサハゴロモについて、埼玉県における生態及び発消長、県内における分布及び農業被害発生地域の拡大、産卵対象として選好される植物種、秋季に産卵された越冬卵が孵化する条件、孵化幼虫の物理的防除方法の検討、等について口頭発表した。誘殺消長からは年2化性を示唆する結果が得られ、また、ツバキ科植物が特異的に産卵対象として選好されることが明らかとなった。

(2) 関東東山病虫害研究会

・第72回研究発表会（令和8年2月26日：水戸市）

（一般講演）「2025年の埼玉県におけるイネカメムシの発生状況と防除対策の取り組み」

近年急増して被害をもたらしているイネカメムシの2025年における埼玉県内の発生状況を、予察灯誘殺数および病虫害防除所定点調査水田での発生推移により説明した。とくに7月における多発生が顕著であり、水田でのすくい取りおよび予察灯での誘殺消長からも裏付けられた。一方で、県全体で取り組んだ広域防除の結果8月以降の発生が大きく抑制され、広域防除の効果、とくに7月の越冬世代成虫を対象とした防除の効果が極めて大きいことを示した。

(3) その他、病虫害に関する研究会及び検討会

・令和7年度「カメムシ類等難防除害虫の発生状況と防除対策に関する検討会」

（令和8年3月12日：東京都北区・対面およびWebによるハイブリッド開催）

（一般講演）「イネカメムシ越冬成虫の越冬場所における密度の推移」

令和6年12月～令和7年3月に実施したイネカメムシ越冬調査のうち、約10地点において4月以降7月上旬にかけて約2週間ごとに実施した追跡調査の結果について知見を公表した。越冬成虫の密度は4月以降低下し、気温の上昇とともに徐々に活動を開始し、越冬場所から移出・分散していることが示唆された。また、7月初めには越冬場所からの移出がほぼ終わるものと考えられた。

(4) 学術誌等への記事執筆

・『植物防疫』第79巻第10号（2025年10月）

「埼玉県におけるチュウゴクアミガサハゴロモの発生について（酒井和彦・高橋 諒）」

埼玉県内におけるチュウゴクアミガサハゴロモの発生経過、農作物被害の発生、発消長及び発生生態、寄主植物、産卵を行う植物種および産卵習性、について寄稿。とくに本種の各生育ステージおよび被害植物の写真を数多く掲載。本種の発生生態とあわせ本種の防除、とくに農薬登録適用拡大の必要性を盛り込んで問題提起を行った。

・『農薬春秋』No. 102（2026 年 2 月）

「埼玉県における斑点米カメムシ類と防除—とくに近年多発しているイネカメムシについて—
（酒井和彦）」

埼玉県内における斑点米カメムシ類の発生動向について、病虫害防除所が実施している 7 月の一斉調査の結果から見える近年の種構成割合の変化と要因、今後の見通しと対策について説明。イネカメムシの発生生態と防除について、本種の越冬状況や雑草・イネ再生株での発生状況も含めて述べ、的確な薬剤防除について説明を行った。